愛知教育大学研究報告，42（人文科学編），pp. 258～250, February, 1993

色道の「かぎり」と「勤の身の悲しさ」

――『諸艶大鑑』巻一の二「誓紙は異見のたね」の解釈――

有働　裕
（国語教室）

一、『諸艶大鑑』と「先書」

『諸艶大鑑』という作品が論じられる際、必ずと言ってよいほどに言及されるのが、巻一の一「親の皃は見ぬ初夢」に記されている「先書批判」の一節である。それは、この作品における西鶴の創作意図を知る「唯一の手がかり」[注1]と見なされてきたことによる。

柳の九市が内證論。小堀法師がまさり草。よしなか染の。宗吉が白烏にも。書につきせず。其後一条の甚入道が。遊女竹割集にも。すいりやうの沙汰多し。伏見の浪人が作りし。太夫前巾着といふ悪書も。見分斗にておかしからず。

この「すいりやうの沙汰多し」等の「先書批判」を重視して『諸艶大鑑』を論じることは、本書を遊女の「真情」[注2]や「まこと」[注3]を描いたものとする理解――現実性を評価するという見解へと必然的につながる。本書と遊女評判記との断絶を、「すいりやう」や「見分」を超えた真の人間性の表出という点に見出そうとするのが、これまでの一般的な研究のあり方であったように思われる。

ところが、このような見解を前提として個々の章の解釈を試みる時、その一章の特色を説明仕切れず、ある種の歯切れの悪さを感じさせるような場合が少なからずある。例えば、巻二の一「大臣北国落」には遊女は姿絵（すがたえ）で登場するだけで、具体的な描写等はなされていない。また、巻四の二の「心玉が出て身の焼印」に記された「さる太夫」のエピソードは、確かに遊里の真実を鋭く描き出してはいるが、一章全体の中に位置付けると思いの外印象が弱まってしまう。遊女の「まこと」や「真情」を描いたと言い切るにはいささか本書はまとまりが悪すぎ、「諸艶」とは「相容れない要素を多く含む」ものであるという指摘[注4]も、そのような事実をふまえてなされていると言えよう。

本稿で取り上げる巻一の二「誓紙は異見のたね」もそういった章の一つである。この章の後半には、新町新屋（あたらし）の小太夫とその客の源との「ほれぬという誓紙」をめぐるやりとりが描かれ、先行研究においてもしばしば取り上げられてきた。ところが、その二人の前に長々と記された手管解説の部分については、これまで積極的な言及がほとんどなされず、「諸分秘伝書的記事を含む」[注5]「まだ評判記風の解説的な叙述が目立つ」[注6]と評される程度であった。そもそも「諸艶大鑑」という作品に対するアプローチの仕方そのものに、

いま此の作品のあちこちの章に分散的に書かれている諸分秘伝

一

の事柄や付随的な事項を除き、それ〳〵の章の中心的な話や思想と考えられるものを凡て対象として整理してみたいと思う。[注7]等、このような記述を切り捨てて論じようとする傾向があったことを考えれば当然のことである。

遊女評判記的な素材を扱いながらも遊女評判記を超えたもの――そのような評価が『諸艶大鑑』に対しては従来なされてきた。そのような本書における「遊女評判記記的」要素とは、いったい何を意味するのだろうか。それは、先行遊女評判記の単なる残滓にすぎないのだろうか。この点については、より詳細な検討が必要であるように思われる。

一方、しばしば論じられてきた源と小太夫との逸話にしても、その「真情」に対する理解が一致しているわけではない。「愛してゐないといふ真実を目の前につきつけられる」ような関係を「遊里人種の不幸」として西鶴は描いたとする暉峻康隆氏の説[注8]に対しては、むしろ「愛の否定」の方が偽りであって、遊女の立場を超えた「真情」を「ほれぬという誓紙」で逆説的に示したとする鈴木享氏の論[注9]が提示されている。

このような「真情」の追究も一つの方法であろう。しかし、「真情」や「まこと」にこだわっている以上、読み切れないものがこの一章にはあるのでは、という疑問が私にはある。これまで論拠とされてきた巻一の一のあの「先書批判」の一節にしても、『満散利久佐』（明暦二年刊）や『美夜古物語』（同年刊）などの記述を視野に入れた場合、遊女評判記における常套的な手法の応用ととらえることもでき、これを作者西鶴の本音の表出として重視することは、解釈を見当違いの方向へ狭く限定することになりかねないようにも思える。

それならば、推量ばかりの先書を批判して遊女の「真情」や「まこと」を描こうとした作品という前提による呪縛を逃れ、改めて遊女評判記の記述と『諸艶大鑑』とを突き合わせて読んでみたらどうなるのか。それによって、これまで見落されてきた部分に意味が見出されるならば、それぞれの章全体の理解にも新たな可能性が開かれることとなろう。

本稿は、そのような問題意識による試みの一つとして、「誓紙は異見のたね」を中心にして私見を述べたものである。

二、冒頭部分の特異性

「誓紙は異見のたね」は、その目録に、

一　江戸京都大坂初床仕掛の事
一　雨の中宿に女郎の難儀工事
一　新屋の小太夫古今無類志の事

と記されている通り、前半に遊興論・遊里案内・諸分秘伝を思わせる内容が記され、後半に誓紙をめぐる二つの逸話――伊丹の明樽の「女郎のめいわくがる誓紙」と小太夫の「ほれぬといふ誓紙」――が収められている。その前半部分を一括して「遊女評判記」的と呼ぶことができるが、ここではまずその冒頭の遊興論風の記述について細かく検討してみたい。

競べ物なき冨士の雪も。是はと詠た斗なり吉野の花も夜まては見られず。姨捨山の月も世間にかわって。毛がはへてもなし。是をおもふに。人間遊山のうはもりは。色里に増事なし。此道に身を染。八宗見學。女色一遍上人の進めに。女良買は抑より。太夫にかゝるがよし。子細は。又上もなき職なれば。かぎりをしつて。留る事はやし。

色道を遊芸の最上級に据え、太夫からこの道に入ることを勧めな

がらも、その理由を「かぎりをしつて留る事はやし」とする――色道を賞賛する一方でその限界を示し、色道そのものを否定しているかのようなこの記述は、一見西鶴らしい「複眼的」なとらえ方や「反語的性格」を示しているように思えるが、極めて遊女評判記的な言い回しの組み合わせによるものでもある。

色里を「遊山のうはもり」とする先例は寛文七年の『吉原すゞめ』にあり、同趣旨のことは『難波鉦』（延宝八年）や『朱雀遠目鏡』（延宝九年）等の序文に目出せる。それらにおいても、色道の否定的側面が続けて述べられており、いわばこの矛盾・対立を含んだ言い回し自体が常套的なものであったと言える。

同様に、最初から「太夫にかゝる」ことから勧めることも、「よきけいせいにかゝりたるは。はやく水と成」（『ね物がたり』「水月」・明暦二年）という主張と同種のものと言うことができる。『色道大鏡』の巻五「廿八品部」や『好色一代男』が粋に達するまでに数々の段階を必要としているのに対して、一足飛びに粋に至る道を示したことが西鶴の独自性であるという見解[注10]もあるが、その点だけではとりわけ新しい発想とは言えないのではないだろうか。

ところが、このように類型的な言い回しを用いながらも、それらを組み合わせることにより、微妙にその意味するところを変化させているのである。

遊女評判記の場合、その矛盾を内包した論理は、つまるところ微温的な「中庸の道」（『朱雀遠目鏡』）を勧め、「遊山のうはもり」である色道を「月花のあそび」（『朱雀諸分鑑』延宝九年）程度にとどめよという警告にたどり着く。「中庸の道」を外れてのめり込んだ末が「すりきり」「あがり鯰」でしかないのであれば、家内安全を第一とする常識的な訓戒が結論となるのも当然のことであろう。

それに対し「誓紙は異見のたね」では、世間一般の倫理や価値観とは無縁なところで、まさにその遊興の世界の中において「かぎり」の訪れることが記されている。「又上もなき」という表現で示される如く、その「かぎり」は、限界としての否定的な意味ではなく、最上級の境地であるという理解である。「先書」に対する単純な反発でもなければもちろん追従でもない、「先書」の記述を生かしつつひとひねりしている点に注目する必要があろう。

この「かぎり」の語に肯定的・積極的な意味が含まれていることについては、最終章との関連による鈴木享氏の指摘が既にあるが[注11]、このこと自体が遊女評判記の記述との差異でもある。もちろん、色道の満たされた最終段階としての「かぎり」は、『色道大鏡』「廿八品部」の「大極品」にも記されているとも言えるが、そこには何の具体性もなく、ただ「春かせのふきおさまりておほろ夜のふけてをとなき波のうなはら」という暗示にとどまっている。では、西鶴は色道の「かぎり」をどう具体化して見せたのか。本章の構成において、この冒頭部分と最後の小太夫の逸話とが遊興の停止という点で対応しているだけに、解釈上の重点として考える必要がある。

三、「勤の身の悲しさ」は強調されているか

ところで、本章はそのまま源と小太夫との逸話へは展開せず、その前に、三都の遊里案内や諸分秘伝的記述、伊丹の明樽の逸話が記されている。この部分を本章においてどのように位置付ければよいのか。先にも述べた通り、本章のこの部分については積極的な意味付けがなされることはあまりなかったが、数少ない先例の一つとして西島孜哉氏の論をあげることができる。

小太夫の「女色」は、現実の「勤めの身の悲しさ」を無視する

三

のではなく、それを強烈に自覚していながら、なお「勤め」の中に粋の世界を構築していこうとするものであった。そこには遊女の人間としての精神の問題と現実の遊里の論理というものが、明確に峻別されているのである。このような遊女の精神の内部と現実の論理「勤の身の悲しさ」の相克の問題は、『一代男』とは、明確に異なる世界のものであることがわかる。そのような意味で、いわゆる遊里の諸分や解説的な記事が評判記的に羅列されているのは、それらが遊里の現実を認識させるために必然的な要素であったことが明確であり、それがあって始めて遊女の精神の内面が現実との関わりの中で浮きぼりにされてくるといえる。(注12)

源と小太夫の逸話を導くための前段階としての評判記的記述――遊女の現実生活の厳しさを確認するものとしてのその位置付けを、西島氏は示していると言えよう。しかしながらこれは、あくまで「いわゆる遊里の諸分や解説的な記事」から「勤の身の悲しさ」を読み取ることができるとの前提に立った理解である。以下、この点を検討しつつ、この部分の持つ意味を考えてみたい。

まず、先に示した「女良買は抑より太夫にかゝるがよし」を受けて、京・江戸・大坂の順で初会の作法が述べられる。「諸分の定めかたき所」である大坂がその中で多く述べられているのは、次の話題である客と遊女との駆け引きへと展開させる必要からであろうが、そのためか、三都の特色はかなり誇張して描かれているように思える。

もちろん三都それぞれの作法はあったのだが、ここに記されているように京・江戸の初会が必ず「捨て枕」と決まっていたわけでもない。『吉原すゞめ』の「はじめてはなす床入の事」や『色道大鏡』巻四「寛文式」下の記述を見る限り、例外を認めないほどに厳格なものではなかったようである。どの遊里においても客と遊女の気持ちのさぐり合いがあり、必ずしも型通りにはすまされないのは当然のことであるが、本章の記述はあえてそういったことを捨象し、三都の違いを誇張して述べたものととらえることができる。

このような戯画的な誇張がなされる一方で、遊客の心理面に立ち入っての記述が乏しいのがこの部分の特色でもある。遊女評判記の諸分秘伝物では、初会の客に対する注意として作法を意識し過ぎて態度が不自然になることがしばしば戒められたりするが、そのような実用性ゆえに言及されてきた内面の問題を取り上げていないのである。そしてこの傾向は、後続する「ふる」ことや「誓紙」についての記述においても顕著である。

手管としての振る・振らぬをめぐる記述についても、類似した内容を先行する評判記類に見出すことができる。例えば、振る時の遊女の態度についての記述は、『ね物がたり』に、

初対面の男。ふり侍らんとおもへは。成程しみ〴〵みと咄なといたしかり。昼の内もきけんよく、少さはり心にみせてをき。さて、床へ入てふたるがよく侍。昼の内、きげんあしくいたし。ふり侍れば、男はぢをあたへ申物也。（「夢契」）

とあり、「皆目のやぼ太郎はむごうてふらず」ということについては、『吉原すゞめ』に、

さればふるといふ事、ひたふるのやぼすけには、せぬ事也、すこしはり合もあり、心いれも有もの見ざれば、ふるものにてはなし、（中略）女郎に、三のしなあり、一には、もとより、生れつきよはものて、ふらぬあり、二には、かひ手のきをかんがみ、たうりをわきまへて、ふるとふらぬとの、しなをたつるあり、

四

三には、とにかくに、ふらねばきかぬかあり、よく〳〵、そのしやうを、わきまへるべし（ふる事）

とある。『こそぐり草』（承応二年）の「いやなやつふりやうの事」「いとしき人ふりやうの事」などを視野に入れて考えれば、本章のこの部分の記述は決して目新しいものではない。

いやむしろ、『難波鉦』の「釣針」などの描写と比較した場合、平板な解説に終始しているとさえ言い得る。長文になるので引用は避けるが、そこには客によって対応を変える遊女の技法とその理由とが細かく記されている。遊女自身の語り口が、自らの行為を恥じて「おとこをふるといふことはない事でござる」と述べつつも、その言葉とはうらはらな実態を口走り、「はづかしながら懺悔します」と結んでいる点にも、単なる諸分の解説にとどまらない人物像の表出があると言えよう。

誓紙についての記述も、本章の場合は、それが信じるに値いしないものであることを強調するにとどまっている。やはり『難波鉦』の「印問答」において、偽りの誓紙を書かねばならない遊女の事情や本音が、遊女自身の口から述べられ、同時にその張りの強さを感じさせるのと比較するならば、陰影の乏しい記述であるということになろう。つまり、西鶴の本章における諸分に関する記述は、客や遊女の内面に迫ろうとするものでは決してなく、手管はあくまで手管にすぎないことを単に指摘するにとどまっているのである。

「勤の身の悲しさ」という言葉は、この後に続く、伊丹の明樽が女郎の迷惑がる誓紙を考えたという話の中で、遊女に一応は同情する立場で使われている。確かに伊丹の明樽の取った行為は言うまでもなく野暮なものであり、非難されるべきものではあるのだが、先の部分との関連で読めば、「勤の身の悲しさ」の強調というよりも、客と遊女との手管の応酬といった形で理解すべきものではないだろうか。被害者となった遊女の姿からある程度の「勤の身の悲しさ」が感じ取れるのは当然ではあるが、おそらくこの話の下敷きになっていると思われる『難波鉦』の『法界吝』と比べてみても、遊女の言い分や立場に触れることを避け、手管のみを記したものと言える。

「法界吝」は後述する問題点と関連するので、少し長くなるがその前半部を引用しておく。

おとこのいはく「何とわれらほど心やすいおとこはあるまい。むりなことはひとつもいわぬ。それゆへ心やすぶりで。いかふじよさいにもてなしやるかと思ふ。是もそなたとゆく〳〵はふうふにもなり。二世までもと思ふ心からいふことじゃ程に。いよしかわらぬ心ならば。きしやうをとりかわしたいの」

三うら「いわんすことなれどきしやうをかきても。かわる心なれば。やくにたちませぬ。かかぬとても心さへたがわねばおなじことでござんす。もはやよふござんすわいの」

おとこ「それなればしんじつじやといやるは。みないつわりじやの」

みうら「又むりなことをいわんす。いまいひますごとく。心はたがひませぬほどに。それにおよびませぬわいの」

おとこ「よふござるきしやうは。ゆるしましよ程に。其だいに。よのおとこにあふときうがいせまいといふ。せいもんたちや」

三うら「ちとたしなましやれ。女ろうのきたない。うがひせぬといふ事がござんしよか。くちがくさければ。人があられぬやまひじやといひ。又わけもなき名をつけます。さすれば。おとこも見かぎり、おちやを引。回し女ろうにも。はりおとされましよ。くちすおふと思ふ人も。きもをつぶし。わるき名がばつ

五

とたちましよが。それは何としましよ」
おとこ「さればこそ。われが心は人にあわするが。いかほどはらがたつ。さうしやうたらば。おればかり会て人にはいらわせまいといふことじや」

いささかコミカルで軽い感じではあるが、遊女自身の口から、御茶を挽き回し女郎に落とされかねない「勤の身の悲しさ」が具体的に示されている。

以上のように、本章のここまでの記述は、遊女や客の「まこと」や「真情」にはほとんど言及せず、「勤の身の悲しさ」もさして強調されているとは思えないものである。むしろ、誇張された表現や「爰に口伝は」等の言い回しは、はなしの場――談笑の雰囲気を強く感じさせる。『諸艶大鑑』の談笑性[注13]――意識的に滑稽化がなされていることについては既に指摘があるが、ここに見られるのは、『難波鉦』に見られるような、遊女を同情的に包み込むようなユーモアではなく、対象を突き放した上でのものであると言えよう。

四、源と小太夫

では、本章の本質はその程度のもの――手管の具体化の面白さ――にとどまるのだろうか。[注14]遊女の「真情」や「まこと」に迫り得なかったとするなら、何においてこの一章は遊女評判記を超え得たと言えるのかという疑問も生じよう。あえて「真情」や「まこと」の問題を捨象して述べる――実は、そのような記述態度（あるいは本章におけるはなし手の設定）こそが、源と小太夫の逸話を通して色道の「かぎり」を具体化する上で必要だったのではないだろうか。

「我を思ふ」との誓紙を書けと言った源に対し、小太夫は、

是はいらぬ事で御座ります。（中略）其かたさまを。未塵おいとしうそんじ申さぬに。かくのごとく書申は。皆偽りでもくるしう御座りませぬか。

と答え、逆に、

此二とせあまり。御威勢にて。結構にあそばし。まことは。流の身の外のやうに。あいなれ侯へども。実は縁なきにや。それ程にはそんぜぬ。

と恨みを述べる。この返答の真意について、源に対する愛情の有無をめぐる二通りの解釈が示されてきたことは既に述べた。この二つの見解は一見対立しているようであるが、そこに否定されるべき遊里の歪められた一面を見出し、この逸話を一種の悲劇としてとらえる点においては共通している。そうとらえる以上、この源の到達した色道の「かぎり」すなわち至上の境地は、どうしても色褪せたものとなってしまう。先に示した冒頭部分の文脈との対応の上から、また、二人が「あかぬわかれ」を目出度く迎えることなどを考え合わせると、この話から否定的な側面のみを取ることはいささか物足りなくとも、また不自然であるかのようにも思われる。

さらにこの部分の記述に立ち入って言えば、ここでの小太夫の真意は、一般の男女の恋愛に対するような尺度では計り難いものとして描かれていると言うことができる。最後の座敷まで馴染みの客として接し続け、「我身の上」を記した一巻を渡すという行為は、明らかに通常の客への対応を超えた好意を示している。にもかかわらず、「ほれぬ」という気持ちが真実であると述べ、請け出されるには至らなかった。巻六の三「人魂も死る程の中」における間夫狂いをする太夫などとは全く異質の感情である。廓の掟に反してまで、廓という制度を超えて相手を愛するような「真情」は、小太夫については描かれていないのである。しかし、源を嫌っていたり、他の一般

の客と同様に扱っていたわけではない。本章のこれまでの部分があえて遊女の内面に立ち入ろうとせずに書かれているのと同様に、小太夫についてもこれ以上その心情には立ち入ろうとしていないのである。

では、結局何が描かれているのか――それは、小太夫の行為とその結果そのもの――つまり、「まことは。流の身の外のやうに。あいなへ候へども。実は縁なきや。それ程にはそんぜぬ」という返答が、実に巧みに源の心をとらえ、二人の関係を色道の「かぎり」としての「あかぬわかれ」へと導いたという事実である。つまり、小太夫は見事に客を振ってみせたわけで、客に対する手管としての「ふる」ことの高度な技巧がここには示されていると考えることができる。

「我を思ふとの誓紙を書け」という源の要求自体、この道に通じた者としては極めて野暮な要求である。事実『難波鉦』の「法界吝」においては同様の要求が野暮なものとして扱われていたのであるが、三浦と違って小太夫は一切弁解などせず、「流れの身の外のように」云々と、馴染みの客なればこそ引き下がれなくなるような言葉を織り交ぜ、見事に振ってみせたと言える。まさに「皆目のやぼすけ」でなかったからこそ振ったのであり、『吉原すゞめ』の言葉を借りれば「かひ手のきをかんがみ、だうりをわきまへて」振ってみたわけである。そのような遊女として、小太夫は「前代未聞の太夫」として賛美されているのである。

このような小太夫に対する源の対応は、分け知りらしく見事に振られてみせたということに外ならない。この点も「法界吝」との大きな差であり、「ほれぬ」という誓紙を書かせることを通して関係を確認するという、遊里の現実を熟知した洗練された行為と言えよう。この両者の存在によって作り出された世界が、上質の客と遊女により実現された色道の「かぎり」と呼ぶべき境地であった。「真情」や「まこと」等の世間的な尺度では測ることのできない、虚構の世界に遊ぶ者の美学の提示がこの逸話の本質ではないだろうか。

小太夫という名の新町の太夫は何人かいたが、「新屋の小太夫」については不明である。現存する記録に名がないだけが、あるいは意図的に設定を改めた結果なのかは断定できない。しかしながら、『満散利久佐』に記された木村屋又次郎抱えの承応期の名伎「先達の小太夫」についての次のような記述は、いささか気になるところである。

是に付て、先達の小太夫事を。思ひいで侍る。先、此比、天下第一の遊女なりき、(中略)此人、常にいへりしは。ながれの身こそ幸なれ。心ざしあるといふ人だにあらば。いかに。その心さしを。むなしうせんや。たとひ偽てもいへ、我はをろかにはきかず。などて、常のことくさにいへりし也、此あだしきことを、しかるべからぬやうに、判じたる者有。それは、当道わきまへぬ心より、いへるなるべし。けいせいたる者の。あだし心なからんは。公家に歌学なく、ものゝふの武勇あらざるがごとし。

「流れの身の外」の関係を期待したと述べる本章の小太夫と、「ながれの身こそ幸いなれ」と言い切る『満散利久佐』の小太夫とは対照的である。だが、いわば職業に徹した良質の「あだし心」を持ち、あくまで遊女として客を大切にする「先達の小太夫」の態度は、「誓紙は異見のたね」の小太夫の技巧とも共通するものがある。西鶴が、あえて「ながれの身」に関する記述を逆転させながら、小太夫の「あだし心」の具体化を試みたとは考えられないだろうか。

いずれにせよ、従来なされてきた遊女評判記と『諸艶大鑑』との

七

図式的な把握――表面的で技巧のみにこだわった非文学的な実用書と遊里の現実や遊女の内面を描き出した作品――では評価できない性格の一章であることは明らかであろう。

五、後日譚の意味

以上のように「誓紙は異見のたね」一章を理解した場合、章末に付された後日譚、後に誓紙をまさに「異見のたね」にしてしまったことをどうとらえるかが当然問題となる。つまるところ色道の「かぎり」が空しいものであることが示されているとの解釈は以前からあり、それは先に示した私見に対立するものとなる。これが決して色道の空しさを示したものではないとする鈴木享氏の卓見[注15]もあるが、それはそれとして、この後年の源の語り口を西鶴の本音とは直結させず、もう少し突き放してとらえるべきだと考えている。というのも、この後日譚の部分には遊女評判記類にしばしばみられる結びの類型、とりわけ『難波物語』の次のような結びを想起させられるからである。

ある人のいはく、つく〳〵せけんのていを見るに、我ゆくうちは、人をしからず、わがえゆかねば、人をそしる、これ。利はつにてそしるにはあらず、ほうかいりんきといふものなり、貴辺も、もしそのたぐひやといへば、それしやは、たゞくちをとぢて、三つ四つうなづいてわらふ

かってその道の分け知りであったと思われる「それしや」の遊里の否定的な紹介は、それ自体体験の豊富さを誇るものでもある。それだけに、聞き手から「貴辺も、もしそのたぐひにや」と問われると、ただ笑う外はない。『難波物語』の中で「それしや」によって繰り返しなされてきた厳しい遊里批判は、この結びによって全て相対化されてしまうと言ってもよいだろう。「ある人」は、教訓する「それしや」の態度の中に見え隠れする、もう一つの感情を見抜いていたのである。

「誓紙は異見のたね」の結びにおいて、かって源と呼ばれた老人は

ほれませぬといふ起請世になひ事なれども。是にさへ見捨がたく。心を尽し通ひぬ。ましてや汝等に。今世智賢（かしこき）女良が。指先やぶりて筆を染。烏の目の所はよげて。水に酒塩をまぜて。裏よりまじない事して。科からさきへ逐るゝ誓紙を取て。うれしがるこそあさましけれ。

と息子や手代に異見する。この親仁の言葉の裏に見え隠れするどこか自慢げな表情を、そして、それを察してほくそえみながら聞いている若い者の姿をここから想像することは、無理なことではないだろう。

もちろん、小太夫の形見「我身の上」については秘して語らぬ源の心境と、『難波物語』の「それしや」の人物造形とには大きな隔たりがある。先に検討したような「かぎり」とは、「それしや」は無縁の存在である。『難波物語』作者の色道に対する微温的態度がそのまま「それしや」の態度となって表出していると考えるべきであろう。それに比して「誓紙は異見のたね」の結びは、異見する源の言葉を記しつつ手代達の視線をも感じさせ、さらには語られない「我身の上」をも視野に入れて源の姿をとらえ直す視点を我々に与えているのである。遊女評判記の類型的な韜晦表現を、重層的な構造を持つはなしの場の設定へと転化させた――そのように評価すべき部分であるように思われる。

巻は秘して見せないようである。それらを一切捨象して、「ほれぬ」という誓紙の異常性のみを印象づけようとしている。下手をすれば、そんなものにまで価値を与える太夫の賛美となり、逆効果になりかねない利用の仕方である。だからそこからの論理の展開は途中で放棄されている。「たゝ商大事にして。何の事もなふ買てあそぶべし。」つまり生活者の一般常識にしっかり帰っただけのことである。」（鈴木氏前掲論文）

（平成四年九月十日受理）

注

（1）野間光辰氏「浮世草子の成立」（一九四〇年十一月、十二月『国語・国文』、『西鶴新新版』に再録。）

（2）暉峻康隆氏『西鶴評論と研究　上』（一九四八年中央公論社）、市川通雄氏「『諸艶大鑑』（好色二代男）の本質」（『日本文学の研究』一九七四年文理書院）など。

（3）吉江久弥氏『西鶴文学研究』（一九七四年笠間書院）、冨士昭雄氏『新日本古典文学大系　好色二代男　西鶴諸国ばなし　本朝二十不孝』解説（一九九一年岩波書店）など。

（4）江本裕氏「『諸艶大鑑』私論」（『論集近世文学3　西鶴とその周辺』一九九一年勉誠社）

（5）野間氏前掲書。

（6）冨士昭雄氏「『諸艶大鑑』の世界」（一九八三年七月『日本文学』）

（7）吉江氏前掲書。

（8）暉峻氏前掲書。

（9）鈴木享氏「「ほれぬ」という誓紙」（一九八八年十二月『島根大学法文学部紀要文学科編』）

（10）鈴木氏前掲論文。

（11）鈴木氏前掲論文。

（12）西島孜哉氏「我身の上」考――諸艶大鑑論序説――」（一九八七年三月『武庫川国文』、『西鶴と浮世草子』に再録。）

（13）高橋俊夫氏『西鶴論考』（一九七一年笠間書院）、谷脇理史氏「『諸艶大鑑』への一視点――その創作意識をめぐって――」（野間光辰氏編『西鶴論叢』一九七五年中央公論社）など。

（14）この問題については、谷脇氏前掲論文の検討という形で、拙稿「『諸艶大鑑』論序説」（『論集近世文学3　西鶴とその周辺』）において詳述した。

（15）「何よりもこの教訓、源自身が経験した「かぎり」を知る所とは関係がない。誓紙の不要や「ほれぬ」という誓紙の価値の出現は、そこまで至らなければ理解出来ない筈である。その経験の何よりの記念である「我身の上」一